

祖母

東部中・3

私には大好きな祖母がいた。四月十二日、膵臓癌で亡くなった。まだ七十二歳だった。

癌のコマーシャルは普段からよく見かけた。出演している人は癌が治った人のものが多く、私も癌は治るものとの印象が強かった。そのため、体育の授業で習った、日本人の病気による死亡原因の一位が癌だということが腑に落ちていなかった。しかし、今回、祖母が癌になったことで、身をもつてそのことを感じさせられた。

それは、部活の練習試合の帰りの車の中で母から告げられた。祖母は癌であると。その時は絶望したが、治らないはずはないと思っていた。癌にステージという進行具合があることを知っていた私は母に聞いた。ステージは三か四のどちらかとのことだった。危ない状況だということはすぐに理解できたが、この時も祖母が死んでしまうなどということは微塵も考えていなかった。

そして同時に名古屋の大学病院に入院する日程が組まれたことも伝えられた。このことを聞き、ようやく事の重大さに気がついた。そして少しでも病院で心を楽にできるようにと考えた。祖母が大好きだったクロスワードや数独など、いろいろ買って出発の前日に手渡した。衣類を詰め、準備する祖母に、

「何か旅行に行くみたいだね。」
と言うと、

「旅行ならいいんだけどねー。」
と祖母は笑ってみせた。

名古屋での一か月間の入院生活を終わると、いろいろ家族で話し合った結果、祖母は大阪の叔母の家で生活し、大きな癌センターに

一人で通院することになった。私は月に一回程度であったが、母と大阪を訪れた。梅田の高層マンションから見える、伊丹空港へ向かう飛行機を見つけては、

「ももちゃん飛行機だよ。」

と無邪気な笑顔を見せる祖母を見て、こんなに元気な祖母が死ぬはずがない、癌であるはずないと感じた。

このところ、母は電話するたびに泣いていた。それは大阪で面倒を見ている叔母からのもので、病状や今後の話をしていたに違いない。その光景を何度目にしても、私は慰めることもできなかった。

抗癌剤で毛が抜け、痩せ細っていく祖母は私の目にどこか別人のように映った。一番辛いのは、効いているかも分からない抗癌剤治療を辛い副作用に耐えながら何か月間も受けている祖母に決まっている。大好きだった食事もお腹が空かなくても時間で流れ作業のようになっている。どんなにきつくても、弱音を吐かない祖母。だから、私なんか泣いていいわけがないとずっとこらえてきた。

辛い事ばかりの闘病生活だったけれど、少し微笑ましいこともあった。祖父と祖母はいつも意見の食い違いで言い争いになっていたが、頑固な祖父が

「大丈夫か。」

と優しく声を掛ける姿を何度も見た。こんな姿は、今まで見たことがなかった。祖父は今までやろうとしなかったスマホを触り、毎日祖母を気遣う、短いが温かいメッセージを送っていた。そして祖母も祖父に対してお礼のメッセージを送っており、温かい会話のキャッチボールがスマホを通して行われていた。

「もう治る見込みがない。」

祖母の体力も抗癌剤治療に耐えられず、終わりを迎えたのが三月だった。もう祖母に対して掛ける言葉もなかった。ずっと希望をもって応援してきたのに、何もしてあげられない自分に不甲斐なさを感じた。

癌は余命が症状でよく分かることも特徴の一つだった。その中で、後一か月ほどだと言われ、私は最後に母と大阪を訪れた。いつも玄関まで迎えに来てくれた祖母はおらず、奥の寝室で血色のない顔で、時が止まったかのように眠っていた。その姿を見ただけで、気持ちのすこく沈んだことを覚えている。祖母は目覚めると、脾臓の辺りを優しくさすりながら言った。

「これが癌だよ。」

痩せて骨が浮き出てきたお腹に拳一個分ほどに大きく膨れた癌があった。祖母の表情には全てを悟りきったような貫禄があった。その姿に私はどうしようもない切なさを感じた。

癌は、どんな体が衰弱していつて、最後には心臓が止まってしまふような穏やかな死を遂げるものだと思っていた。しかし、それは違つて、最後の最後まで苦しんで痛みを伴つていくものだったのだ。代わる代わる痛がる祖母の背中やお腹をさすりながら、痛み止めで対応する母たちの様子を見ているのがとても辛くて苦しかった。次の日、癌センターへの最後の受診に付き添い、タクシーに乗った。体の痛み、吐き気で辛そうな祖母の背中をずっとさすり続けた。

無慈悲にも時は過ぎた。主治医から話を聞く場面では、私一人以外で待つてほしいと言われてしまった。取り残された私は、子供だからと、何もできない自分に失望した。少しすると祖母以外に話があると、祖父、叔母、母の三人だけまた診療所に入つていき、今度は祖母と二人で廊下のソファで待つことになった。ソファで横たわる祖母を見て、若い看護師が心配そうに声をかけてくれた。私は、

「大丈夫です。」

と祖母の背中をさすり続けた。

その後、目を赤くして出てきた母と叔母、そして遠い目をしている祖父を見て、私は良い話じゃなかったんだなということを悟った。母は外で待つていた私に、

「祖母に付き添つてくれてありがとう。」

と何度も言った。私がいなかったら、先生からの大切な話が聞けなかったのだという。最後に、少しでも祖母の役に立てて良かったと心からそう思った。

そして、祖母は、そのまま緊急入院となった。ああ、もう会えないのかな。家には帰つて来れないのかな。そんなことが頭をよぎつた。別れ際に、何度も何度も祖母に抱きついて握手をして感謝を伝えた。しつこいくらいに何回も何回も。何度、ハグをしても足りない。それくらい別れがつかつた。

ある朝、父が静かに部屋に入つてきた。

「ばあちゃんが亡くなつたつて。」

体に衝撃が走つた。覚悟はしていたはずなのに。寝起きの悪い私は、いつもなら二度寝三度寝が当たり前だったが、その日は父のその一言で目が冴えてしまつて、することもなくベッドを出た。その日の朝ご飯は、全然喉を通らなかつた。

入院から十日後の事だった。その週の土日に祖父母の家に行くと、大阪から運ばれた祖母が大広間で眠りについていた。急に起き上つて、今にも喋り出しそうだった。

「寝るのが一番幸せだ。」

と言つていた祖母がもう目覚めない事実、癌が発覚してから半年しか経つていない事実。自分には受け止めきれなかつた。それでも、納棺師さんと一緒に祖母に化粧をしたり、旅立つ準備をみんなですること、少しずつ気持ちが落ち着いていき、祖母を見送ることができた。

今、当たり前前に感じている大切な存在は誰でもあるだろう。家族はもちろん、ペットと送る毎日のありふれた生活も、それは当たり前と呼ぶべきではないと私は思う。その当たり前は保障されたものではない。

祖母は、急な病に冒され、人生を終えてしまつたけれど、いつ起

きてもおかしくない南海トラフ地震や事故など、いつどんな終わ
方になるのかは誰にも分らない。だから、いつ何が起きて後悔
しないように日々の生活にありがたみをもって生活したい。今の自
分も、将来の自分も、周りの人もみんな大切にして生きていきたい。
失ってから、後悔するのは、あまりにも悲しい事だと私は思う。